

博士(文学) 朴孟洙 (パク メンス)

学位論文題名

日本近代と韓国との関係

— 東学思想, 甲午農民戦争, 日清戦争を中心に —

学位論文内容の要旨

本論文は、朝鮮の甲午農民戦争（1894-5年、韓国では東学農民戦争または東学農民革命と呼ぶ）における思想、組織および反政府と抗日の運動を、最近韓国で発掘された初期東学教団・教徒史料、日本の外務省・防衛庁史料や新聞史料などによって再検討し、従来の通説の基本的な枠組みを批判し、新しい甲午農民戦争像を示した研究である。

本論文の観点は、(1)として、東学思想の民衆宗教思想としての歴史的意義を検証することであり、東学思想の農民戦争における役割について否定的な従来の通説の再検討である。(2)として、甲午農民戦争時に東学内部の北部の勢力（「北接」）と南部の勢力（「南接」）の内部対立を重視し、第二代教主崔時亨の「北接」が第一次甲午農民戦争を阻止したり、蜂起した「南接」と対立したとする通説にたいする再検討である。論文は、東学農民戦争が蜂起した民衆的基盤と背景を、通説より深く広範なものと捉えている。(3)として、東学の「斥倭洋」（反外勢、民族意識）の思想を、初期から一貫しつつ発展したものととらえて、反封建から、反外勢への転換と観てきた通説を批判している。

実証の方法としては、従来の東学思想と甲午農民戦争の研究は、植民地支配下に編纂された東学系教派の史書に依拠したために、農民戦争後、少なくない東学教派が親日に傾斜し、教派の自己保存のために事実を削除したり、歪曲した点についての検討が不足しており、当時の東学初期の史料の探索とともに、実証的吟味が必要とされるという方法を貫いている。従来重視されなかった東学初期の教団・教徒の史料を申請者自身の韓国フィールドワークによって発掘し、あるいは、他の研究者によって発表された史料を再評価している。また、日本外務省と防衛庁の文書に注目し、東学農民軍を全滅させた日本外務省と軍部が集積した探索報告や日本のマスコミ特派員などの記事を調査している。外務省の関連

史料は、韓国精神文化研究院から申請者の解題・解説を付して『近現代史料叢書 東学農民戦争関係資料集』全7巻（約4000頁）として、日本外務省の公式の許可を請けて2000年7月に刊行され、本論文の基礎的史料ともなっている。外務省と防衛庁の文書の探索報告などに採録された当時における多数の初期東学文書は、韓国には残存していない貴重なものである。これらの史料を韓国の史料と対照しつつ再検討し、事実を明らかにしている。

第1章では、東学思想、甲午農民戦争、日清戦争に関する史料の問題を検討している。韓国で最近発見された初期東学の史書類、また日本側の膨大な外務省所蔵文書や防衛庁所蔵文書、新聞などを現在の段階で可能な限り網羅し、それぞれの位置づけを確認し、従来の研究を再検討する必要性を指摘している。

第2章では、韓国、日本、朝鮮民主主義人民共和国における研究史と研究の問題点を検討している。結論として、甲午農民戦争当時の東学教団や教徒だけではなく、朝鮮政府や日本側の史料も系統的に整理されていなかったことを指摘している。また、東学系各教派の史料を検討する際にも、長期に及んだ政府と日本の弾圧を避けるために、弾圧の要因となりうる事実が削除されたり、歪曲された点を検証する必要があることを述べている。歪曲された後代の伝聞によって、いわゆる「南接と北接」（南部の蜂起した勢力と北部の穏健な勢力に分ける見解）の対立を、事実と反して誇張する研究などがあると指摘している。

第3章では、東学思想そのものを検討している。初め影響力のあった朝鮮民主主義人民共和国や日本の研究者によって、いわゆる「宗教外皮論」が適用され、東学思想や東学教徒の役割を少なく評価する立場が主張された。これにたいして、民衆思想としての初期東学の原典史料を検討し、東学思想が西洋の概念の「宗教」でとらえきれものではないこと、朱子学に由来する朝鮮の伝統的思想構造に基づく「道・教・学」という複合的な思想構造、つまり自然と人間、社会を有機的にとらえる思想構造であり、西欧的な分節化された「宗教」とは異なると指摘し、朝鮮民衆の受容についても実証している。

第4章では、「斥倭洋」運動から甲午農民戦争の前段階までの第二代教主崔時亨を中心とする東学の組織と指導体制を検討している。東学「接」組織は、人脈を基にした結束力の強いもので、東学道人の平等と相互扶助が原則とされたと指摘する。東学の地域基盤は、初代教主崔済愚の逮捕と刑死、教団への弾圧によって、初代教主が基盤とした慶尚道南部地域から崔時亨が居る慶尚道北部地域に移った。しかしこの頃は東学の指導体制の空白時代で、李弼済の指導する寧海伸冤（教主の復権）蜂起が起き、崔時亨も蜂起に参加したこ

と、寧海蜂起の敗北後、崔時亨は、逃走しつつ活動の拠点を慶尚道北部地域から江原道南部と忠清道北部地域に移し、姜時元らと秘密結社の中心部をつくったことを検証している。

第5章は、「斥倭洋」運動から甲午農民戦争の段階までの、従来「南接」（東学の南部勢力）と「北接」（東学の北部勢力）の対立といわれてきた通説を、多くの新史料によって再検討しており、論文の中心部分である。通説では第二代教主崔時亨を指導者とする「北接」と、南部の全羅道で蜂起した全瑋準らの「南接」の、蜂起をめぐる根本にかかわる対立があり、「北接」は、蜂起（第一次甲午農民戦争）に反対し、日本軍の侵入によってようやく戦争に参加した（第二次甲午農民戦争）とされてきた。本論文では、「南接」と「北接」とも、当時の東学組織を称する言葉ではなく、「北接」は一時朝鮮北部に逃れていた東学全体の最高指導者としての崔時亨の肩書きとして、「南接」は全羅道（朝鮮南西部）の指導者全瑋準が日本軍に逮捕され、審問の陳述のなかではじめて便宜上使った言葉であることを論証している。また、第一次甲午農民戦争に際して、「北接」の崔時亨が、戦争に蜂起した「南接」の全瑋準を「非難」し、戦争に「反対」したという先行研究の指摘が、外務省所蔵の「朝鮮国東学党動静二関シ帝国公使館報告一件」所収史料、『東京朝日新聞』の特派員の記事、金九の自叙伝である『白凡逸志』の記載などを比較検討した結果、間違いであり、両者は「協力関係」を保っており、崔時亨が全羅道の民衆指導者全瑋準に呼応して蜂起の指示（「起包令」）を下していることなど、多くの新事実を明らかにしている。

第6章では、甲午農民戦争期における東学農民軍の日本認識について検討している。初期東学のハングル教典「ヨンダムユサ」の日本関係の記述では、秀吉の朝鮮侵略を批判する内容があり、日朝修好条約から「斥倭洋」運動の段階までは、日本人の経済侵略や朝鮮への軍艦派遣のために、「斥倭洋」の意志が表明されたこと、第一次甲午農民戦争では、「逐滅洋倭」などの意志が、表明されたこと、この段階では、日本の侵出への反対は、武力を伴わないことを解明している。日本軍による朝鮮王宮占領事件（最近中塚明氏が発掘した、事実上の日朝戦争）が東学農民軍に影響を与え、抗日戦争、第二次甲午農民戦争が起きたこと、朝鮮の民衆宗教運動、東学の中心に「斥倭洋」の意志が一貫して存在、展開したことを、反封建からの抗日への転換という通説を批判しつつ、実証的に検証している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 井 上 勝 生
副 査 助 教 授 白 木 澤 旭 児
副 査 助 教 授 城 山 智 子

学 位 論 文 題 名

日本近代と韓国の関係

－東学思想，甲午農民戦争，日清戦争を中心に－

審査の要旨を、論文の基礎的な方法、および成果の審査、審査の結論の順に述べる。

従来の甲午農民戦争関連史料と、植民地時代からの韓国・日本・朝鮮民主主義人民共和国における研究史の詳しい検討の結果、東学系教団が植民地支配下、徹底的な弾圧にあったために、従来の研究が依拠してきた、主に1920年代以降に編纂された東学系の史書については、東学教派の少なくない勢力が「親日」に転向し、自己防衛のために行った歴史的事実の削除や歪曲があり、再検討が必要とする厳密な立場を貫いている。申請者自身の韓国のフィールドワークによって発掘した東学初期の教団・教徒の史料、あるいは、他の研究者によって発掘された同様の新史料を第一次史料として採用している。

また、甲午農民戦争の研究者として初めて、膨大な日本外務省や防衛庁の文書の全体を調査し、東学農民軍を全滅させた日本外務省や軍部が集積した甲午農民戦争の探索報告書など、そこに採録された、現在の韓国にも残存していない、多くの甲午農民戦争時の東学教団の作成した重要文書を明らかにしている。同時に、日本の新聞特派員による東学指導者のルポルタージュ記事などを網羅的調査によって資料として見出し、韓国の史料と対照しつつ、事実を明らかにしている。

その成果は、(1)として、東学思想の農民戦争における役割を否定したり、あるいは部分的にしか認めない従来の通説を批判し、朝鮮固有の民衆思想としての東学思想の積極的意義について、「ヨンダムユサ」など原典の異本を申請者自身も発掘し、比較校訂をくわえ、経典の朝鮮民衆への流布状況も解明し、朝鮮の伝統思想に立つ、「道・教・学」が一体となった実践的民衆思想であることを検証したことである。

(2) として、初期東学および秘密結社時代の、組織と指導の問題を解明し、人的な結合を基にする「接」という組織が道人の平等と相互扶助によって形成されていたこと、慶尚道南部を基盤とした初代指導者崔濟愚の刑死後、指導部の混乱時代を経て、東学有力指導者が蜂起して弾圧されるなかで、第二代の指導者崔時亨の指導権が、慶尚道から北部の山岳地域一帯の秘密結社において形成されたことを明らかにした。

(3) として、甲午農民戦争時に東学内部の北部の勢力（「北接」）と南部の勢力（「南接」）の内部対立を重視し、第二代教主崔時亨に指導された、いわゆる「北接」が、第一次甲午農民戦争の蜂起を阻止したり、蜂起した民衆指導者全璣準を中心とする「南接」と対立したとする通説に対する批判である。検討の結果、いわゆる「南接」と「北接」という勢力の分裂が、その各々の呼称も含めて、当時実際には存在しなかったこと、両者は、同じ檄文のもとに行動をともにしたこと、いわゆる「北接」の教主崔時亨も「起包令」を発して、全璣準の第一次蜂起に応じたことを明らかにしている。東学農民軍が、侵入した日本軍にたいして蜂起した基盤と背景を、通説より朝鮮社会のはるかに深部に及ぶ広範なものという大きな枠組みをはじめて解明した。

(4) として、東学思想の「斥倭洋」（反外勢・抗日）の思想について、反封建から反外勢への転換とする通説を批判し、日朝修好条約以後、高揚しつつ、非暴力的抗議に止まる段階、次に日清戦争の日本軍の侵入と朝鮮王宮占領事件による亡国の危機を契機として武力蜂起する段階へと一貫して発展したことを解明している。教主崔時亨らの北部の勢力と全羅道の民衆指導者全璣準が、争うべき対立点を持たなかったことを明らかにしている。

(1) の崔濟愚刑死後編纂された経典「ヨンダムユサ」などの民衆宗教原典の分析は、難解さを免れないが、反封建のような抽象的評価にとどまらない、朝鮮民衆の固有思想としての豊かな考察への道筋として評価する。(2) (3) と (4) の検証は、韓国の初期東学史料のフィールドワークによる発掘や、韓国には現存しない日本外務省・防衛庁史料に採録された初期東学の文書の探索、その結実のひとつである申請者による日本外務省所蔵の甲午農民戦争関係資料の韓国での公刊（全7巻、2000.7刊）など、確実な史料的根拠によって果たされている。とりわけ、外務省史料などの多くの基礎的史料の発掘、および(3) における甲午農民戦争の民衆的基盤の深さの解明は、枠組みを変える画期的成果であり、韓国や朝鮮民主主義人民共和国、日本などの学会に大きな影響を与えると評価する。

以上の成果を審査し、評価して、審査委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに相応しい研究成果であることを全員一致して認めた。